

レポート・ライティングに対する学生の気づき —初年次教育における試みと課題—

當銘美菜

(宇部フロンティア大学短期大学部保育学科)

Awareness of First Year Students for Report Writing
—A Practical Study on the First-year Experience Program—
Mina Tome
(Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

本稿では、初年次教育クラスを受講した学生が、レポート・ライティングに対してどのような気づきを得ているかを明らかにした。受講後に学生が記述したコメントシートを分析した結果、レポート・ライティングに対する学生の気づきを14に分類することができた。そのうち、「いろいろな人の関与が必要」および「書くことは難しい」は、3回の講義を通して毎回記述されていた気づきであった。

講義を受けることにより、学生はレポート・ライティングに取り組む姿勢を身に纏うことを体験するが、回を重ねるに連れて、「書くことは難しい」と感じる学生も多くなる。初年次教育クラスを受講することにより、レポート・ライティングがどのようなものかという臆気な輪郭を描くことが可能になるが、ライティングの作法に則り、自身の主張を文章に綴ることができるようになるためには、連続性のある継続的な学びの機会を整える必要がある。

キーワード：初年次教育、レポート・ライティング、気づき、学生、コメントシート

1. はじめに

2000年代に入り、日本における多くの大学で初年次教育が急速に導入されている。本稿では、初年次教育クラスで実施したレポート・ライティングに関する実践を取り上げ、受講後の学生の気づきから、今後の課題を考察する。

1.1. 初年次教育とは

初年次教育は、「「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」¹⁾と定義づけられている。2000年代に入り、急速に普及し、2008年には初年次教育学会の設立、あわせて、中央教育審議会答申『学士課程教育の構築

に向けて』において学士課程における正規の教育としての位置づけがなされたこともあり、大学における初年次教育の定着化が進んでいる。

文部科学省が実施した平成25年度の調査²⁾によると、初年次教育を導入している大学数は、690大学で全体の94%になっており、普及が着実に広がっていることが分かる。しかし、1970年代に初年次教育が始まったアメリカなどに比べると、日本における取り組みの歴史はなお浅く、「初年次教育のペダゴジーが必ずしも学生のラーニングや成長に関する理論に依拠しないまま、実践が先行している状況となっている」³⁾との指摘がある。また、多様な学習内容が提供されているものの、「実証的根拠に基づいて評価・改善が図られているとは言い難い状況にある」⁴⁾。

前述した調査では、課程を通じた学生の学修成果の把握状況についても調査を行っているが、学部段階で把握している大学数は47%で、大学全体に至っては

22%に留まっている。また、標準化されたテストやアンケート調査などを通じて明らかになった学修成果は、教育課程や教育方法の改善および学生への履修指導やキャリア相談に活用されているが、その割合は学部段階でさえ3割を切っている状況である。

初年次教育学会では、大会の自由研究発表のキーワードとして「学習成果・効果測定」や「授業デザイン」を挙げており、初年次教育に対する評価・改善の必要性が認知されていることが分かる。しかし、実際に評価・改善のサイクルを導入するためには、初年次教育が高等学校で習得すべき基礎学力の補習教育とは異なるとされていることや、多分野にわたる教育内容ゆえ、複数の教員がオムニバス形式で講義を担当していること等を考慮する必要があるだろう。

前者に関していえば、初年次教育は、国際的には「First Year Experience (初年次体験)」と呼ばれており、学習および学生生活における初年次体験の包括的な支援と捉えることができるが、このような学生の初年次体験はどのように評価できるだろうか。また、その評価は、どのように教育課程や次の支援につなげていけるだろうか。以下では、初年次教育の中でも、特に、レポート・ライティングに関する実践を例に、その試みと課題について検討していく。

1.2. 初年次教育におけるレポート・ライティングの位置づけ

2001年に全国636学部に対して実施された調査によると、初年次教育の重要度が最も高かったのは、「レポート・論文の書き方などの文章作法」で63.7%だった⁵⁾。レポート・ライティングに関しては、平成25年度の大学における教育内容等の改革状況に関する調査においても、初年次教育を導入している大学の84.1% (621大学) で取り組みがされており、その割合は、平成20年の69.8%から5年間で約14%上昇している⁶⁾。

このような取り組みがある一方、文章を書くことに対して苦手意識を持っている学生は依然として多い。渡辺(2010)が勤務校の新入生を対象に行った学習技能に関する調査によると、初年次学生の64.4%の学生が「まとまりのある長い文章を書くこと」に対して「苦手」と回答したという⁷⁾。また、レポート・ライティングに対する評価は、学生の能力と関連づけられて語られることも多いが、「できない」のではなく、「知らない」あるいは「練習が足りない」という可能性も

検討しなければならない」との声もある⁸⁾。

学生は、レポート・ライティングに関する初年次教育クラスを受講し、何を体験するのだろうか。本稿では、レポート・ライティングに対する学生の気づきを手ごかりに、学生の体験に迫ってみたい。その上で、初年次教育におけるレポート・ライティングに関する実践の今後の課題について考察する。

2. 講義の概要

A短期大学における初年次教育は、1年次の前期に1単位で開講されている。筆者が担当した年度は、全15回の講義時間のうち4回をノートの取り方やレポート・ライティングの学習に用いた。

「ノート・レポートの書き方」の講義において、筆者が学生に伝えたかった点は、以下の2点である。

- ①答えがあり、それらを覚えることが学習の全てではなく、覚える答えすらない問いがあり、その問いにどのように向き合うかは自分次第だということ。
- ②教師もまた学生と同じ学び手であり、正解を持っている人ではない。同様に、教科書や参考書、メディアで見聞きする情報を鵜呑みにせず、必ず批判的に見るということ。

ノートやレポートを書くための具体的な技法を身につけることはもちろん大切だが、それ以上に「あたりまえを疑うこと」を体験してもらうことを重視し講義を行った。以下に具体的な講義内容を示す。

表1 講義内容

回	学習内容	使用した教材
1	ノートの取り方	PPT, DVD 視聴, 配布資料
2	レポート・ライティング (1)	PPT, DVD 視聴, 配布資料
3	レポート・ライティング (2)	PPT, 配布資料
4	引用について	PPT, 配布資料

講義には、2学科約90名の学生が参加していたが、入学前にレポート・ライティングに取り組んだことがないという学生も少なくなかった。

初回の講義後のコメントシートには、レポート・ライティングの経験がないがゆえに「簡単に考えていた」、「思っていたよりレポートは複雑で一人ではでき

ないものなんだと思った」というコメントがあった。また、レポート・ライティングに取り組んだ経験のある学生も、「レポートとは何を書けばよいのか、レポートとはどんなものなのか知らないまま書いていた」とコメントしており、受講生は全般的にレポート・ライティングに不慣れであったといえる。

3. 方法

3.1. データの収集

XX年度開講の初年次教育クラスを受講したA短期大学1年生が提出した「授業を振り返って／感想・質問」（以下、コメントシートとする。）をデータとした。コメントシートは、毎回講義の終わりに記述する時間を設け提出してもらい、コメントを付けた後、翌週の講義冒頭で学生に返却した。本稿では、ノートの書き方をメインに扱った初回分を除く計3回のコメントシートの記述を対象に分析を行った。

3.2. 分析の手続き

分析は以下の手順で行った。

- (1) 3回分のコメントシートの内容を概観し、それぞれレポート・ライティングに対する学生の気づきだと思われる箇所を抽出する。
- (2) 抽出した学生の気づきを回毎にグループ化し、グループ名を付ける。
- (3) 回毎のグループをグループ間で検討し、精査する。
- (4) 確定したグループに含まれる学生の気づきの割合をグループ毎に示す。

以上を踏まえ、グループ毎に具体的な記述にあたりながら、学生の気づきを明らかにした。学生の気づきは、1学生につき1つという単回答ではなく、記述の内容によって、複数抽出されることもあった。そのため、表中に挙げられた人数の合計と受講者数とは一致しない。

4. レポート・ライティングに対する学生の気づき

4.1. 講義内容（2回目）：レポート・ライティング（1）

まず、1回目の講義に対する学生のコメントを全体で共有した。

レポート・ライティング（1）では、レポートをどうやって書くのか、レポートはどのように作られてい

くのかという、レポート・ライティングの過程について講義を行った。最初に、レポート・ライティングを学ぶ理由について考えてもらったが、書くことが求められるだけでなく、「なぜ、今、ここで」レポート・ライティングを学ぶのかについて、「他者との対話を通じて、多様な視点に触れる」、「レポートはひとりですべて書いているのではないということを知る」という二点を示した。

また、レポート・ライティングの過程を「読み手・他者・自己」という3つの「対話」として、それぞれの対話について説明を行った。

対話を実際に体験するために、DVD（インドシナ難民の両親から生まれた子どもたちを取り上げた内容）を視聴した後、自分の考えをまとめ（5分）、グループメンバーと意見交換（15分）する時間を設けた。

最後に、コメントシートを記入。全体的な感想以外に、具体的な問いとして、「レポートを書くということは、具体的に何をすることですか」を一つ設けた。

4.2. 学生の気づき

「レポート・ライティング（1）」受講後の学生の気づきを表2にまとめる。

表2 レポート・ライティング（1）受講後の気づき

	学生の気づき	全83名中
1	いろいろな人の関与が必要	56名（67%）
2	自分の主張がある、その主張について考え続けることが必要	40名（48%）
3	読み手・他者・自己との対話が必要である	38名（46%）
4	読み手を意識して書く必要がある	36名（43%）
5	書き直しが必要	15名（18%）
6	書くことは難しい	6名（7%）
7	意見をまとめることは難しい	
8	人それぞれに異なる考え方や捉え方がある	各2名（2%）
9	時間がかかる	1名（1%）

表2のとおり、学生の気づきを9つに分類することができた。その中で学生が最も多く挙げていたのは、レポートを書く過程においては「いろいろな人の関与が必要」だということ、83名の受講者中、56名の

学生が記述していた。

(学生の記述)

- ・ 書くのは一人だけど“サポート”があってこそできるもので、人に読んでもらうものだから考えて書き直す作業が大切。
- ・ レポートは、独りで作っているものだと思っていたけれど、たくさんの人の声を聞いて一つのレポートができることを知った。
- ・ レポートは一人で作っているとずっと思っていました。でも今日の講義を受けて、いろんな人の声が含まれているということを知り、納得できました。

講義の中では、ノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授が「研究を完成させることは一人ではできない」と、他の研究者たちのこれまでの功績を称えると同時に、山中教授の研究室在籍の学生らの「ハードワーク」について言及したことを一つの例として挙げた。

次に、40名の学生が自身の気づきとして記述していたのは、レポートには「自分の主張がある」ということ、「その主張について考え続けること」がレポートを書くということだという気づきである。

(学生の記述)

- ・ 人の意見を聞いたり、資料を参考にしながら、自分はそれについてどう思うか、また最初に思っていた自分の考えと比べて何を感じたかを自分なりにまとめて文章にし、その意見を伝えること。
- ・ レポートは、自分の考えを理解してください！聞いてください！と伝えるところなので、自分の考えを自分でしっかり理解しないといけないということがよく分かった。
- ・ ただ書くだけではなく、“自分の意見が常に正しいとは限らないので”，他の人の意見、・アドバイスを上手に取り入れ、考え続けることでレポートは生まれる。
- ・ レポートは、書きなさいと言われて書いているものだと思っていたけれど、誰かに何かを伝えたいと思ったときに書くことなんだと思いました。

「自分の主張」に関しては、主張そのものが必要なんだということへの気づきもあれば、主張を相手に伝えるために自分で明確にしておく必要があるという気づき、さらに自分の主張を批判的に捉え、考え続ける必要があるという気づきなど、多層的なコメントが挙

げられた。

また、「読み手・他者・自己との対話が必要である」「読み手を意識して書く必要がある」という気づきはそれぞれ38名、36名の学生が記述していた。

(学生の記述)

- ・ レポートは、自分の考えを書くものだと思っていたけれど読み手のことを考えたり、異なった意見を入れて考え直すということだと分かりました。
- ・ レポートというのは自分の意見だけを自分がわかりやすいようにまとめたものだと思っていました。他者の意見を入れつつ広い視点から考えて、自分の考えにしていこうと思いました。
- ・ レポートとは具体的に「読み手」に自分の考えを伝えることだと学びました。そのために、他の人との対話や自己との対話、考えつづけることが大切だと分かりました。

レポート・ライティングに対して、学生は何らかのイメージを持っているが、自分の考えを、一人で、一度で完成させると捉えていることが推察できる。他者との関わりの中で生きている「自分」は、関わる人たちとのやりとりによって作られている。講義後、学生たちは、レポート・ライティングとは、さまざまな声で成り立っている自分の考えを、読み手・他者・自己との対話の中で、何度も練り直していく活動であるという気づきを得ていることが読みとれる。

4.3. 講義内容（3回目）：レポート・ライティング（2）

まず、2回目の講義に対する学生のコメントを全体で共有した。

レポート・ライティング（2）では、レポートに何を書くのかという、レポートの内容について講義を行った。最初に、いいレポートとはどんなものかを、感想文との違いから考えてもらった。そして、いいレポートの条件として「問いと答え（主張、自分の考え）が含まれている」「答えを裏付ける根拠がある」「序論・本論・結論の流れがある」という三点を示した。

次に、外国人の子どもに関する短い文章を読み、提示された問いに対して自分なりの答えを考えてもらった。設定した問いは、「外国人の子どもの保育における①病気に関する問題／②生活習慣の違いから起こる問題／③言葉の問題／④保育所への持ち物、入園の準備／⑤宗教上の問題に対して、保育士（栄養士）はどのように対応すべきか」で、①から⑤の問題から1

つを自身の問いとして自由に選択してもらった。

実際に問いと答えを含む序論を書いてもらう際には、レポート・ライティングに対する不安を取り除き、且つ他者との対話を体験してもらうために、1～3名単位でのレポート作成を可とした。最後に、コメントシートを記入してもらった。

4.4. 学生の気づき

「レポート・ライティング（2）」受講後の学生の気づきを表3にまとめる。

表3 レポート・ライティング（2）受講後の気づき

	学生の気づき	全82名中
1	書くことは難しい	40名（49%）
2	感想文とは違う	27名（33%）
3	序論・本論・結論という構成に留意しなければいけない	15名（18%）
4	準備や練習が必要	3名（4%）
5	いろいろな人の関与が必要	各1名（1%）
6	書けるという感覚	

表3のとおり、学生の気づきを6つに分類することができた。その中で学生が最も多く挙げていたのは、「書くことは難しい」ということで、82名の受講者中、40名の学生が記述していた。

（学生の記述）

- ・人が書いたレポートを見て読んで、大して気に留めないでいたけど、実際自分で考えて書いてみて、何から書いていけばいいのか、何の問題をどのように主張していくとか、文を構成することがとても難しかった。
- ・レポートの書き方が分かりました。ですが実際に書いてみると、うまく文章がまとまらなかったりまだ少し難しかったです。
- ・入試の時にレポートを書いたので、何となく書き方は分かっていたけど、改めて今日書いてみて、自分の考えを人に伝えるのはやっぱり難しいなあと思いました。

これらの記述からは、実際に序論を書く活動の中で、学生らがレポート・ライティングの難しさを体験したことが推察できる。レポートに対するイメージを持っていたり、講義を受け内容を理解したと思っていたに

もかわらず、「実際に」書いてみると難しかったという体験に裏打ちされた気づきである。

次に、レポートは「感想文とは違う」という気づきを27名が記述していた。

（学生の記述）

- ・自分が良いと思って書いていた文章はほぼ「感想文書き」だった。
- ・レポートをいざ書いてみると、感想文になったり、だらだら書いてしまう。

「書くことは難しい」という気づきと同様、「感想文とは違う」という気づきも自分に引きつけて捉え直された気づきである。レポートと感想文の違いについての講義を受け、自分がこれまでに書いた文章を思い起こし、はっとする気づき、また、両者は違うと理解した上で序論を書いているにもかかわらず、感想文になってしまうことへの気づきである。

その他、1名のみではあったが、レポート・ライティング（1）の受講後、最も多くの学生が記述していた「いろいろな人の関与が必要」という気づきを挙げている学生もいた。

（学生の記述）

- ・今まで、レポートを書くことがなかったので正直難しく不安です。分かっているでも自分で文章にしていくところで行き詰ってしまいます。そんな時に、他の人に見てもらって、意見やアドバイスをもらうことが大切だと思いました。

この記述からは、「いろいろな人の関与が必要」ということが（1）受講後の気づき以上に切迫したものとして感じられていることが分かる。実際に書くという状況に置かれた今、他の人の意見やアドバイスが必要だと実感しているからこそこの気づきだといえる。

また、以下のような記述もあった。

（学生の記述）

- ・今日は、序論を書いてみた。組み立てていくと割りと筆が進んだ。疑問に思ったこと、重要なことをピックアップしていくと、少しだけ“ピン”とくるようになったのが嬉しかった。

講義を受け、レポートを書いてみて、自分の中に「書けるという感覚」が生まれていることへの気づきが記されている。“ピン”と表現されたこの感覚は、僅か

なものかもしれないが、序論が本論へ、そして結論へ進むように、次の学習につながっていく流れが感じられる記述である。

4.5. 講義内容（4回目）：引用について

まず、3回目の講義で書いてもらった序論にそれぞれコメントを付けて返却した。第二稿を書くにあたり、「問いと答えが含まれているか」や表記、文体について、推敲のポイントを全体で確認した。

次に、引用について説明を行った。ここでは特に、実際の例を新聞記事などで共有しながら、誰でも「剽窃」をしてしまう可能性があることについて強調した。そして、引用をする際、実際にどのようなルールに則って書いていくのかを具体的な文章を用いて理解を深めてもらった。

3回目の講義で用いた外国人の子どもに関する短い文章を再度読み直し、序論を含む全体レポートを書いてももらった。その際、主張の根拠となりうる資料を3種類配布し、それぞれから1回、計3回の引用を推奨した。冒頭のタイトルから参考文献までを完成させたレポートを原稿用紙4枚以内に書くこととした。最後に、コメントシートを記入してもらった。

4.6. 学生の気づき

「引用について」受講後の学生の気づきを表4にまとめる。

表4 引用について受講後の気づき

	学生の気づき	全84名中
1	書くことは難しい	45名 (54%)
2	時間がかかる	24名 (29%)
3	引用するためのルールがある	10名 (12%)
4	準備や練習が必要	9名 (11%)
5	序論・本論・結論という構成に留意しなければいけない	7名 (8%)
6	いろいろな人の関与が必要	各5名 (6%)
7	意見をまとめることは難しい	
8	感想文とは違う	4名 (5%)
9	書き直しが必要	各2名 (2%)
10	自分の主張がある、その主張について考え続けることが必要	

表4のとおり、学生の気づきを10に分類すること

ができた。その中で学生が最も多く挙げていたのは、「書くことは難しい」ということで、84名の受講者中、45名の学生が記述していた。

（学生の記述）

- ・実際にレポートを書くということもして、気持ちを文に表す難しさや、問いにすることの難しさを知りました。
- ・1つの課題について考えてまとめるのがとても難しくかった。作業をしている間、何度も何が書きたかったのか、何を主張したいのかなど忘れて、話がそれることが多かった。

3回目と同様、「書くことは難しい」という学生の気づきは、実際にレポート・ライティングに取り組んだ体験から得た気づきである。4回目は序論だけではなく、それに続く本論、そして結論を書く課題であったため、内容、構成、引用など留意すべき点が多くなり、難しいと感じる学生が増えたことが推察できる。

また、言語化することが難しいだけでなく、自分の主張を明確に意識しながら書き進めていく難しさを感じた学生も複数いたようである。

次に多かったのは、24名の学生が記述していた「時間がかかる」という気づきであった。

（学生の記述）

- ・やはりレポートは短時間では書けないということがとても良く分かりました。文をまとめるのもすごく難しくて時間がかかりました。
- ・とても難しく、時間が足りませんでした。
- ・レポートを1時間で完成させることの大変さを今日改めて知りました。本当に大変で一つ一つまとめるのにも時間がかかって大変だった。

「時間がかかる」も「書くことは難しい」という気づき同様、実際の体験に基づいたものである。4回目の講義では、指定された時間内にレポートを完成させることを体験してもらった。

想定していたわけではなかったが、時間内に課題を完成できた学生（グループ）がなかったことから、以下の学生の記述にもあるように、日頃からレポート・ライティングに取り組む必要性を感じたようであった。コメントシートには、9名の学生が「準備や練習が必要」だと記述していた。

（学生の記述）

- ・レポートを書くことの大変さや、事前の準備がとて

も重要だなと感じました。

- ・レポートは何を書けばいいのかわかりませんでした。みんなを理解させる文章を作るのはこんなにも大変だということが分かりました。だからこそ、こつこつレポートの書き方を練習していかないといけないなと思いました。

「引用するためのルールがある」ということを知らなかった学生は多かったようである。また、記述からは、引用を怠ることの危険性、およびレポート・ライティングの大変さや難しさを体験したからこそ、留意していかなければならないという気づきを得た学生もいたようである。

(学生の記述)

- ・読み手に上手く伝わるか、この文章は変ではないかととても気をつけながら書きました。引用をする時は、著者名などの詳細をきちんと書かなければ大変な事になること、知ることができてよかったです。
- ・レポートを書くことは本当に難しいと思いました。序論をまとめたり、考えたりするのは頭をすごく使うし、大変でした。これを剽窃するというのはいけないと思いました。引用等、使う時は、十分に気をつけてレポートを作成していきたいと思いました。

4.7. まとめ

これまで見てきたように、学生はレポート・ライティングに対して、レポート・ライティングの過程や内容に関するさまざまな気づきを得ていた。その中でも3回の講義を通して、共通して挙げられていた気づきは、レポート・ライティングには「いろいろな人の関与が必要」だということ、「書くことは難しい」という2点であった。

特に、「書くことは難しい」という気づきは回を重ねるごとに多くの学生が自身の気づきとして挙げている。本来であれば、講義を受け、レポート・ライティングを理解していくことで、「難しさ」が軽減されたり、改善されていくことが期待されると思うが、「難しさ」を感じたその先までは、講義で扱うことができなかった。

ただ、レポート・ライティングとは何だろう、どうやって書いていくのか、自分は書けるだろうか、といったことを、学生は実際に書くことを通して体験することができたのではないだろうか。レポート・ライティングに対して無防備でいた身体は、講義を受けた今、

学生一人ひとりの構えとして形作られ、レポート・ライティングに取り組む姿勢の第一歩となったといえる。

しかし一方で、現状のままでレポート・ライティングに向かうことは確かに「難しい」。学生の気づきにもあったように、レポート・ライティングは準備や練習を含め、自分の主張について考え続け、書き直していく必要があるため、時間がかかるものである。そのため、先行研究^{9) 10)}でも指摘されているように、継続的にレポート・ライティングに関わるための機会を整える必要がある。

5. おわりに

本稿では、初年次教育クラスを受講した学生のコメントシートから、レポート・ライティングに対する学生の気づきを明らかにした。分析の結果、学生の気づきを以下の14に分類することができた。()内の人数は3回分の合計を示している。

表5 レポート・ライティングに対する学生の気づき

1	書くことは難しい (91名)
2	いろいろな人の関与が必要 (62名)
3	自分の主張がある、その主張について考え続けることが必要 (42名)
4	読み手・他者・自己との対話が必要である (38名)
5	読み手を意識して書く必要がある (36名)
6	感想文とは違う (31名)
7	時間がかかる (25名)
8	序論・本論・結論という構成に留意しなければいけない (22名)
9	書き直しが必要 (17名)
10	準備や練習が必要 (12名)
11	引用するためのルールがある (10名)
12	意見をまとめることは難しい (7名)
13	人それぞれに異なる考え方や捉え方がある (2名)
14	書けるという感覚 (1名)

以上から、わずか3回の講義ではあったものの、学生は初年次教育クラスを通じて、レポート・ライティングを「知る」きっかけを得ることができたと思われる。それぞれの学生が得た「知る」きっかけを、どのように「更なる理解」や「実際の運用」などにつなげていけるかについては、初年次教育クラス内、および

学科内科目との関連のみならず，課程外支援の可能性も含め検討が必要である。

最後に，本稿では学生がコメントシートに記述した内容のみを分析の対象としている。そのため，学生が「記述していない」あるいは「記述できなかった」コメントについては，扱うことができなかった。講義内で自らの気づきを整理したり，積極的に表現することが難しい学生の気づきを，どのような方法で明らかにすることができるかについては今後の課題としたい。

に関する分析，飯田女子短期大学紀要，第30集，129-140，2013。

- 10) 山崎智代，山崎紀久子，日向野香織：初年次教育における効果的な教授方法について－医療保健学セミナーにおけるレポートの書き方に関する一考察－，医療保健学研究，7号，31-43，2016。

引用文献

- 1) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて(答申)，2008。
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (閲覧日：2016年11月18日)
- 2) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室：平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)，2015。
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afiedfile/2016/05/12/1361916_1.pdf (閲覧日：2016年11月18日)
- 3) 山田礼子：大学における初年次教育の展開－アメリカと日本，クオリティ・エデュケーション，2，157-174，2009。
- 4) 山田礼子：日本における初年次教育の動向－過去，現在そして未来に向けて，初年次教育の現状と未来，11-27，世界思想社，2013。
- 5) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて(答申)，図表(2)，2008。
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2008/12/26/1217067_006.pdf (閲覧日：2016年11月18日)
- 6) 前出2)
- 7) 渡辺哲司：「書くのが苦手」をみきわめる－大学新生の文章表現力向上をめざして，11-12，学術出版会，2010。
- 8) 藤浦五月，中川祐香：初年次アカデミック・ライティングクラスのための構造積み上げ型教材の開発と学習者評価，日本語教育方法研究会誌，20(2)，14-15，2013。
- 9) 岩月すみ江，伊藤洋子，神澤絢子，鈴木真由美，矢澤玲子：初年次看護学生のレポートを書く力